

The *Developed Historical Sense* and the Consciousness of "Italy" in Cassiano dal Pozzo's Paper Museum (Museo Cartaceo)

Noriko Kotani

16世紀～17世紀イタリアのアート・コレクションとコレクター ケース・スタディ：カッシアーノ・ダル・ポッツ

小谷 訓子

カッシアーノ・ダル・ポッツ（1588-1657）は、徹底した態度で収集に臨んだ17世紀イタリアの知識人である。彼のコレクションは、メダル、奇石、書籍、絵画、彫刻、機械類など多岐にわたるが、その中でも特に「紙の美術館」と呼ばれる素描のコレクションは注目に値する。ヴィジュアル百科事典とでも言えばよいのだろうか——「紙の美術館」は、生活に関わる全てのものを描き記したもので、カッシアーノの図書室に何巻にもわたって編集された素描画集である。それは、数名の素描画家によって記録された動物から植物、建築、宗教儀式、奇石、美術／工芸品に至るまでの素描作品群を編纂した一つのプロジェクトなのだ。

「紙の美術館」についての先行研究は、大きく二つに分類することができる。一つは、フランシス・ハスケルに代表されるもので、「紙の美術館」の物理的な状態に問題の焦点を絞り、このプロジェクトが原物の収集ではなく、紙に写された複製を収集したものであることを強調する研究である。これは、「紙の美術館」を仮想の収集、つまり本物の収集ではなく代用品の収集として捉える解釈なので、カッシアーノの限定され

た予算を問題の中心として捉え、収集活動の下部構造を浮彫りにするものである。

もう一つは、「紙の美術館」の科学的な側面を強調し、カッシアーノがガリレオ・ガリレイと交流があったことなどを文脈として提示する解釈である。この場合、研究者たちは、素描が客観的で科学的に描かれていることを讃えるのである。「紙の美術館」が事物を複数の角度から記録していることや、断面図も伴っていることなどを理由に、カッシアーノのコレクションは、人類が世界を科学的に捉え始めたことを示すプロジェクトであると唱える。

先行研究によって打ち出されたこの二つの視座を承認しながらも、その一方で、私はカッシアーノの「紙の美術館」が更なる次元からの視点を受け入れる奥深さを持っていると考える。従ってここでは、ジョセフ・アルソップの『レア・アート・トラディション』の論を礎に、「紙の美術館」が、カッシアーノのイタリア人としてのアイデンティティの自覚と、成熟した歴史観を表象するコレクションであることを論じる。